

佳作  
ババの まほうの手

兵庫県  
雲雀丘学園小学校三年

真鍋 安夕

「ではテストを返します。」

先生がひややかに言った。どきんとむねがなった。丸められたテストを、席でおそるおそるひらく。二こもまちがえていた。七点もひかれていた所もある。どうしよう。目の前がまっ暗になり、みんなの声が小さくなった。その時、(あっそうだ！今日はババが来る日だ。ババに相談しよう。)わたしはやつと少し元気をとりもどした。

ババはママのお母さんで、みのおという所に住んでいる。めがねをかけていて、動物にたとえるとふくろうだ。きびしいことも時どきいうけど、いつもわたしをえだにとまつて森を見守っているふくろうの様に見守ってくれている。鼻はかぎの様な形をしていて、学校にババがむかえにきた時、学校の子に、「あつ、まほう使い！」といわれた事もあつた。わたしが元気な時は電話は一日に一回しかかけてこないけれど、病気の時は一日に何回もかけてきて「体温は何度か。」とか、「食よくはあるのか。」とか心配する。わたしがおちこんでいるときや、しんどいときなどは、ババはわ

たしの足をさすってくれる。そのいも虫の様な手でさすってもらうと、何だか心がおちつくのだ。

学校がおわつて、重い足どりで教室をでた。校門の所に、ババのおどっているすがたがみえた。わたしが走っていくと、ババはニコニコしながらよつてきて、わたしの手をにぎり坂をおりた。帰つてくると、ママにきこえないように、「いっしょにトイレに入つて。」とたのみ、ババと二人でトイレに入り、かぎをかけた。テストの事をうちあけると、ババはニヤニヤしながら「ママは二つまちがえたくらいではおこらないよ。」といつてくれた。わたしはホツとしてかぎをあげ、ババといっしょにトイレからでた。結局おこられてしまったけれど、ババはだまつて、あのいも虫の様なきもちのいい手で、足をさすってくれたので、悲しみやくやしきの雲が、ゆつくり晴れていく様に思えた。

ババ、まほうの手で、わたしをいつも元気にしてくれて、ありがと。